被害の再発可能性がゆるしに及ぼす影響

若山 和樹（名古屋掖済会病院，g126018i@gmail.com）
八田 武俊（京都女子大学 心理共生学部，hattata@kyoto-wu.ac.jp）
八田 純子（愛知学院大学 心理学部，hatta105@dpc.agu.ac.jp）

Effect of likelihood of threat recurrence on forgiveness

Kazuki Wakayama (Nagoya Ekisaikai Hospital, Japan)
Taketoshi Hatta (Faculty of Psychology and Collaboration, Kyoto Women's University, Japan)
Junko Hatta (Faculty of Psychology, Aichi Gakuin University, Japan)

Abstract

Based on a comprehensive definition of forgiveness, we defined forgiveness as involving both anger, as an emotional aspect, and the perception of threats, a cognitive aspect that has been under-researched. We assumed that the perception of threats associated with harm could be classified into three categories: the interpersonal threat of the perpetrator, the threat of a harmful situation, and threat of beliefs in a just world. Furthermore, we assumed that forgiveness would be more likely to occur when the likelihood of harm recurrence was low. Hence, this study examined whether the low likelihood of harm recurrence, through the appraisal of the perpetrator and physical circumstances, would mitigate anger and each perceived threat. Participants were 132 Japanese university students who responded to a questionnaire on anger and each threat after they read a scenario. Results indicated that the likelihood of harm recurrence, as assessed through the appraisal of both the perpetrator and physical circumstances, mitigated anger, reflecting the emotional aspect of forgiveness. A factor analysis revealed that the cognitive aspect comprised the threat of harm, which included the threat of both interpersonal and circumstance as one, and threat of beliefs in a just world. The results demonstrated that perceptions of the threat of harm were mitigated by decreasing the likelihood of harm through the appraisal of both the perpetrator and physical circumstances. Conversely, perceived threats to beliefs in a just world were only mitigated by decreasing the likelihood of harm through the appraisal of the perpetrator, not physical circumstances. These findings suggest that the perception of threats related to future risks is a crucial cognitive aspect of forgiveness.

Key words

forgiveness, anger, threat of harm, threat of beliefs in a just world, likelihood of harm recurrence

1. はじめに

近年、ゆるしに関する研究への関心が高まっている。しかしながら、ゆるしの定義について、明確なコンセンサスが得られているとはいえず（McCullough & Witvlet, 2011）、とくに、認知的側面を扱った研究はほとんど見あたらない。そこで、本研究ではゆるしにおける情動的側面としての怒りに加え、認知的側面である脅威の緩和をゆるしのプロセスと捉え、被害の再発可能性がゆるしをもたらすことについて検討する。

1.1 ゆるしの定義

これまで、ゆるし研究では、感情や動機づけの変化に注目した研究が多くみられる（Enright, 2001; Worthington, Witvliet, Pietrini, & Miller, 2007; McCullough, Bellah, Kilpatrick, & Johnson, 2001）。しかし、Thompson and Snyder（2003）はゆるしを否定的な認知、記憶、情動、行動を中立的ないしは肯定的に変化させることと定義しており、これはゆるしが情動や動機づけだけでなく、記憶などの認知的側面にも関わることを意味する。

ゆるしについては、変化という点についても研究者によって定義が異なる。ゆるし研究の先駆者である Enright（2001）はゆるしを道徳的基準に従って怒りなどのネガティブな反応を意図的に放擲し、代わって慈愛などのポジティブな反応が生じることと定義している。しかし、加害者に対する怒りが慈愛へと変化することはあまり現実的ではない。そこで、Thompson and Snyder（2003）はポジティブな感情や認知が生じなくても、ネガティブな反応が減少することもゆるしに含まれることを指摘する。以上のことから、本研究においても Thompson and Snyder（2003）が指摘した包括的な定義に従って、ゆるしをポジティブな状態への変化を必要としないネガティブな状態の緩和と捉え、「自身の感情を害することを知覚し、それに向けられた否定的な感情、認知、動機づけあるいは行動が、中性あるいは肯定的に変化する個体内のプロセス」とした加藤・谷口（2009）の定義に従う。

これまで、我が国において、論文として刊行されたゆるしの実証研究は決して多くない。また、そのほとんどが否定的な情動、認知、動機づけの変化を挙げている（例えば、石川・濱口，2007; 加藤・谷口，2009）ものの、ゆるしの測定において個人の感情や認知の変化を測定した研究は少なく、ゆるしの個人的傾向を用いたものや、「許せるか」といった包括的で一時的な評価を尋ねたものが

多い。そこで、本研究ではゆるしにおいて生じるネガティブ情動や認知を具体的に示し、その変化について測定する。加えて、これらの変化を促す要因について検討する。

1.2 ゆるしにおける怒りと脅威の知覚の緩和

ゆるしにおいて、怒りは最も緩和が期待されるネガティブ情動である。他者に対するゆるしは他者の違反行為や加害行為によって生じる心理的反応であり（McCullough & Witvlet, 2011; Worthington, 2003）、怒りは他者の加害行為によって被害にあったと知覚することで生じる情動である。つまり、ゆるしの情動的側面において最も生じやすい心理的反応が怒りの緩和である。このことは、特性的なゆるしを測定する尺度の開発において、怒りを妥当性の指標とし、総じて関連性が認められていることからも明らかである（石川・濱口，2007; 加藤・谷口，2009）。それゆえ、本研究では、ゆるしの情動的側面の一つとして怒りについて検討する。

本研究では、ゆるしにおける認知的側面の緩和についても検討する。ゆるしにおける認知的要素としてBradfield & Aquino（1999）は加害者への責任の帰属に注目し、ゆるしに対する前向きな態度との関連を示しているが、帰属の変化については明らかにしていない。国内では、沼田・小浜（2022）が回顧的測定によって加害による傷つきの変化をゆるしと捉え、傷ついた出来事の重要度との関連を検討しているが、その他にゆるしのプロセスにおいて認知的変化を扱った研究は見当たらない。そこで、本研究では、ゆるしにおいて緩和される認知的要因として、脅威の知覚に焦点を当てる。

ゆるしにおいて脅威の緩和が期待される理由として、まず、ゆるしは他者の違反行為や加害に対する反応であり、当事者は加害者やその行為を脅威として認識することが挙げられる。そして、ゆるしの情動的側面において顕著な怒りは、脅威の知覚によって生じることが指摘されており（Baumeister, Smart, & Boden, 1996; Novaco, 2011）、これらの見解は、認知神経科学の観点からも支持されつつある（Novaco, 2016）。さらに、脅威の知覚が不安や抑うつなど、ゆるしの対象となりうる怒り以外の情動とも関連することから（例えば、Mogg & Bradley, 2016; Lancaster, Cobb, Lee, & Telch, 2016）、本研究ではゆるしにおける重要な認知的反応として脅威の緩和について検討する。

1.3 ゆるしにおけるさまざまな脅威

被害を受けた際、人々が知覚する脅威の対象は加害者に限らない。これまで、加害に対するゆるしの測定では、特定の加害行為に対する特定の人物に向けられたゆるしを評定させており（McCullough, 2000）、それは、被害を受けた当事者のゆるしの対象が、加害者と加害行為に及ぶことを意味する。つまり、人々は何らかの加害行為を知覚した際、加害者と加害行為のそれぞれに対して脅威を知覚すると想定できる。そこで、本研究では被害をもたらした加害者に対する脅威であり、加害者である特定の個人によって継続的に被害にあうと予期することを対人脅威、特定の加害者に限らず、過去に被害を受けた状況と類似した場面で他者から同様の被害を受けると予期することを場面脅威と定義する。

ゆるしにおいて緩和が期待される脅威の対象は、加害者や加害行為による直接的な被害に限らない。被害者は、加害行為によって今後の安全や安心に対して、「また同じことが起きるのではないだろうか」と懐疑的になったり、「普通にしていてもまた同じ目に合うのではないだろうか」と不当に被害にあう可能性を予期し、「結局他人は信用できない」と一般的な他者に対する信頼感を損なうこともある。こうした「世界は公正で安全な場所であり、人は自分に見合ったものを受け取る」とする態度は公正世界仮説（Lerner, 1980）として知られており、阿部（2008）は、被害経験によって公正世界信念が揺らぐことで、今後の被害可能性に対する評価が高くなることを示している。本研究では、被害体験によって自らが所属する集団の秩序や安全性、公平性、一般的な他者に対する信頼といった個人の信念体系が脅かされることを世界観脅威と定義する。

これらのことから、本研究では、被害を受けた際に知覚する脅威の対象について、対人脅威、場面脅威、世界観脅威を想定し、これらの脅威の緩和がゆるしの認知的側面であると考える。

1.4 ゆるしと再発可能性

本研究では、ゆるしにおける怒りや脅威の緩和は、被害体験における加害行為や加害者に関する認知的評価の結果として生じると考える。これまで、被害が意図的に生じたもので、加害者の責任に帰属される場合、ゆるしは生じにくいことが示されている（Boon & Sulsky, 1997; Girard & Mullet, 1997; McCullough, Worthington, & Rachal, 1997; Mullet & Girard, 2000）。

その理由として、加害者への責任帰属や加害行為の意図性の高さは、被害者に被害の再発可能性を知覚させることが挙げられる。本研究において緩和が期待される怒りは、他者の行為が意図的であるとき生じやすく（Averill, 1983; Ferguson & Rule, 1983）、意図的な行為は将来的にも生じる可能性が高いことから、脅威の対象となりやすい。被害者は繰り返し被害にあうことを恐れるため、ゆるしを表明しにくいことが指摘されており（Exline & Baumeister, 2000）、それゆえ、将来的な被害の再発可能性が怒りや脅威の知覚の緩和を妨げると考えられる。

被害の再発可能性が脅威の緩和に影響を及ぼすことは、謝罪がゆるしを得るうえで効果的なことからも窺える（たとえば、大渕，2015; Rapske, Boon, Alibhai, & Kheong, 2010; Williamson & Gonzales, 2007）。将来的に被害が再発する可能性とゆるしとの関係について、加害者に搾取されるリスクの高さはゆるしの動機づけの低さを説明する要因であること（Burnettle, McCullough, Tongeren, & Davis, 2012）や、加害者による謝罪や補償の提案といった和解行動は将来的に搾取される危険性を低いと知覚させるため、ゆるしを促すことが示されている（McCullough, Pedersen,

Tabak, & Carter, 2014）。

以上のことから、本研究では、被害の再発可能性が低いと知覚することで、ゆるしは生じやすいと考えるが、被害の再発可能性について、加害者に対する評価と物理的な環境による 2 つの操作を行う。加害者に対する評価では、加害行為の常態化によって再発可能性を操作する。また、物理的な環境では、加害者と物理的に接触する機会を操作することで再発可能性を操作する。いずれの再発可能性においても、再発可能性が低いことは怒り（仮説 1）や脅威（仮説 2）の緩和をもたらすと予測する。

2. 方法

2.1 参加者と手続き

参加者は 4 年制大学の学生 132 名（男性 62 名、女性 70 名）、講義後に配付された質問紙について説明を受けた後、参加に同意できる者のみ回答し、そうでない者は回答せずに提出した。なお、本研究は所属 A 大学における倫理審査委員会の承認（No. 16-05）を得て行われた。

2.2 質問項目

参加者は、被害に関するシナリオを読んだ後、怒りやさまざまな脅威に関する質問項目に「全くーない（1)」から「かなりーある（7)」の 7 件法で回答した。ゆるしにおいて緩和されるネガティブな反応のうち、情動的側面である怒りについて、「この上司に対して、どれくらい腹が立ちますか？」「この上司に対して、どれくらい怒りを感じますか？」の 2 項目（$\alpha = .94$）を設けた。認知的側面である脅威については、対人脅威として「この上司は今後もあなたを傷つけると思いますか？」「この上司は今後もあなたを不快にさせると思いますか？」の 2 項目（$\alpha = .85$）を設け、場面脅威として「今後も似たような出来事によって、あなたは傷つけられることがあると思いますか？」「今後も似たような出来事によって、あなたは不快にさせられることがあると思いますか？」の 2 項目を設けた（$\alpha = .89$）。世界観脅威については、将来に対する漠然とした不安を測定するため「この出来事は今後もあなたの安心を脅かすものだと思いますか？」「この出来事のせいで、今後もあなたは不安を感じると思いますか」の 2 項目（$\alpha = .82$）を設け、一般的な他者に対する信頼性を測定するため「この出来事のせいで、他人は信用ならないと思いますか？」「この出来事はあなたにとって他人への信頼感を脅かすものだと思いますか？」の 2 項目を設けた（$\alpha = .84$）。

2.3 実験デザイン

本研究における実験デザインは、2 つの被験者間要因と 1 つの被験者内要因の 3 要因からなる混合要因計画で、被験者間要因は物理的環境による再発可能性と加害者評価による再発可能性によって操作した。被験者内要因は操作シナリオの前後で測定された測定値からなるシナリオ操作要因であった。

2.4 実験操作シナリオ

参加者は、被害状況に関するシナリオ（「新入社員であるあなたは、初めて任された仕事でミスをしてしまいました。そのことを上司に報告したところ『中途半端な気持ちで、集中して仕事をやらないからそういうミスをする。どうせ嫌になれば辞めればいいと思っているなら、社会人の前に人として失格だ』と同僚がいる前でひどく責められました。」）を読んだ後、ゆるせなさや怒り、脅威の知覚に関する質問項目に回答した。その後、再発可能性を操作したいずれかのシナリオを読んで、先と同じ質問項目に回答した。

本研究では、物理的環境による再発可能性が高い状況と低い状況を被害後の加害者との接触機会によって操作した。物理的再発可能性が高い条件では、加害者である上司が業務監督を務めることになり、仕事で関わる機会が増えたという状況を提示した。これに対して、物理的再発可能性が低い条件では、その上司が違う部署に移動したため、仕事で関わる機会が減少するという状況を提示した。

また、再発可能性を加害者の印象によっても操作した。評価的再発可能性が高い条件では、加害者である上司は部下の面倒をみないなど評判が悪く、常日頃から若い世代を馬鹿にした発言を頻繁に行っていたとする情報を提示した。これに対して、評価的再発可能性が低い条件では、面倒見がよく、部下からの評判もよい上司であるが、先月、面倒を見てきた部下の一人が、いい加減な仕事をしてミスをした挙句、その処理も途中で会社を辞めていたことがわかったとする情報を提示した。

3. 結果

本研究では、怒りや脅威に関する得点を従属変数とし、それぞれの得点について、シナリオ操作要因と物理的、評価的再発可能性要因を独立変数とする分散分析を行った。本研究では、これらの従属変数の変化に注目するため、シナリオ操作要因との交互作用についてのみ報告する。なお、全ての従属変数についてシナリオ操作要因 × 評価的再発可能性×物理的再発可能性の 3 要因による交互作用は有意でなかった。

3.1 怒りと再発可能性

シナリオ操作×評価的再発可能性（F (1, 147) = 10.77, $p < .01$）とシナリオ操作×物理的再発可能性（F (1, 147) = 12.55, $p < .01$）の交互作用がそれぞれ有意で、図 1 と図 2 に示したように、評価的、物理的再発可能性の高低にかかわらず、怒り得点はシナリオ操作前よりも操作後において有意に低く（$ps < .05$）、評価的、物理的再発可能性が低い条件は、それが高い条件よりもシナリオ操作後の怒り得点が低かった（$ps < .01$）。なお、シナリオ操作前の得点について、両再発可能性の効果は有意でなかった。

3.2 脅威に関する因子分析

本研究では、脅威の対象を対人、被害場面、世界観脅威に分類し、世界観脅威はさらに今後に対する不安と他

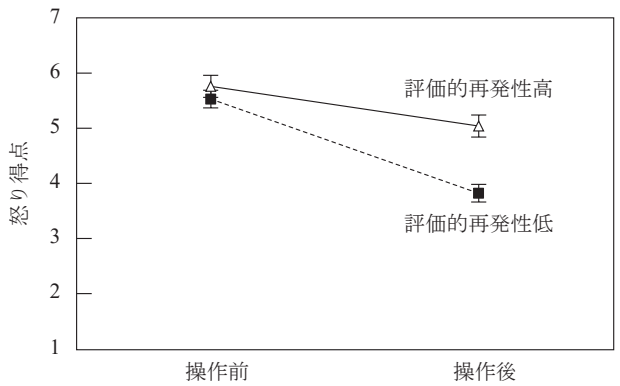

図 1：怒り得点における評価的再発可能性とシナリオ操作の交互作用

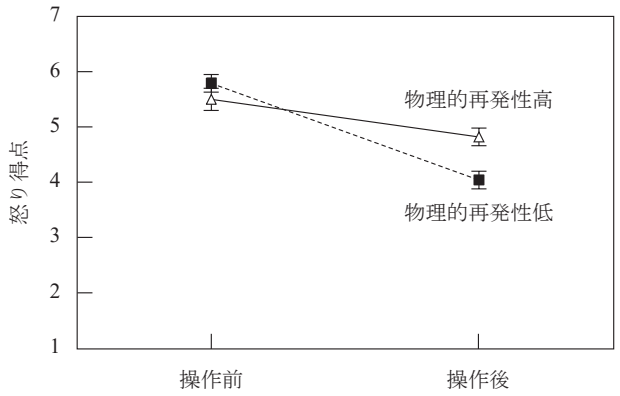

図 2：怒り得点における物理的再発可能性とシナリオ操作の交互作用

者に対する信頼感に分けて項目を作成したが、これらの妥当性について調べるため、因子分析（最尤法・プロマックス回転）を行った。その結果、2 因子が抽出されたが、世界観脅威のうち、今後に対する不安に関する 2 項目は因子間の負荷量の差が小さかったため、これらの項目を削除して、再度因子分析を行った。その結果、表 1 に示したように、2 因子が抽出され、対人脅威と場面脅威に関する項目が高い付加を示した因子を被害脅威因子、他者に対する信頼感に関する項目が高い負荷を示した因子を世界観脅威とした。また、このことから、本研究では、3 つの脅威を想定したが、加害者と加害場面に関する脅威について弁別できなかったため、これらを 1 つの被害脅威として、分析を行う。

3.3 被害脅威と再発可能性

シナリオ操作×物理的再発可能性（F (1, 147) = 75.63, p < .01, η_p^2 = .34）、シナリオ操作 × 評価的再発可能性の

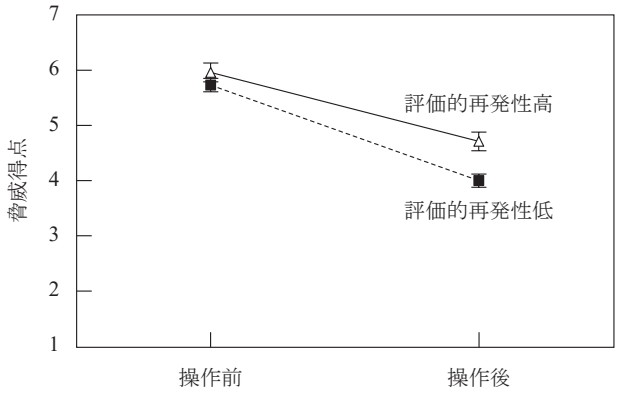

図 3：被害脅威得点における評価的再発可能性とシナリオ操作の交互作用

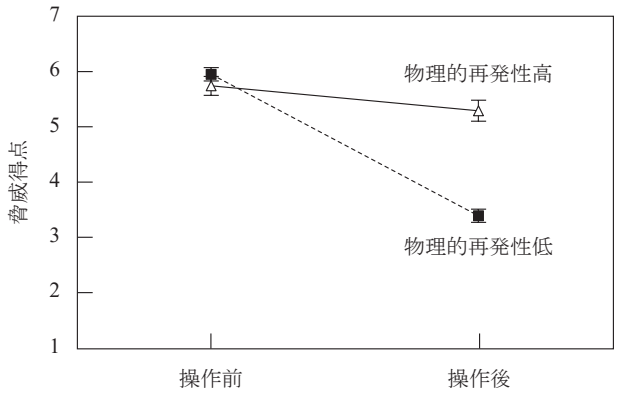

図 4：被害脅威得点における物理的再発可能性とシナリオ操作の交互作用

表 1：脅威の項目に関する因子分析の結果

	I	II
因子 I：被害脅威（α = .873）		
今後も似たような出来事によって、あなたは傷つけられることがあると思いますか？	.890	–.021
今後も似たような出来事によって、あなたは不快にさせられることがあると思いますか？	.876	.004
この上司は今後もあなたを傷つけると思いますか？	.737	–.014
この上司は今後もあなたを不快にさせると思いますか？	.649	.057
因子 II：世界観脅威（α = .844）		
ずっと昔のことなのに、思い出すたびに腹の立つ出来事がある。	–.022	1.006
人生の中で経験したいくつかの出来事については、今でも怒りを感じる。	.041	.720
因子間相関	I	II
I	1.00	.313
II		1.00

交互作用が有意であった（F (1, 147) = 4.37, p = .04, η_p^2 = .03）。下位検定の結果、シナリオ操作後のみ、評価的、物理的のいずれにおいても再発可能性が低い条件は高い条件より被害脅威得点が低かった（ps = .04; < .01）。また、脅威得点は評価的、物理的再発可能性に関わらず、シナリオ操作前よりも操作後の方が低かった（図 3 と図 4）。

3.4 世界観脅威と再発可能性

シナリオ操作×評価的再発可能性の交互作用が有意であった（F (1, 147) = 6.60, η_p^2 = .04）。下位検定の結果、シナリオ操作後のみ、評価的再発可能性が低い条件は高い条件より世界観脅威の得点が低く（p = .04）、評価的再発可能性が低い条件のみ、シナリオ操作前よりも操作後の脅威得点が低かった（p < .01）。

また、シナリオ操作×物理的再発可能性の交互作用が有意であった（F (1, 147) = 10.06, p < .01, η_p^2 = .06）。下位検定の結果、物理的再発可能性が低い条件のみ、シナリオ操作前よりも操作後の脅威得点は低かったが（p < .01）、シナリオ操作後の物理的再発可能性に関する条件間に有意差は示されなかった（図 5 と図 6）。

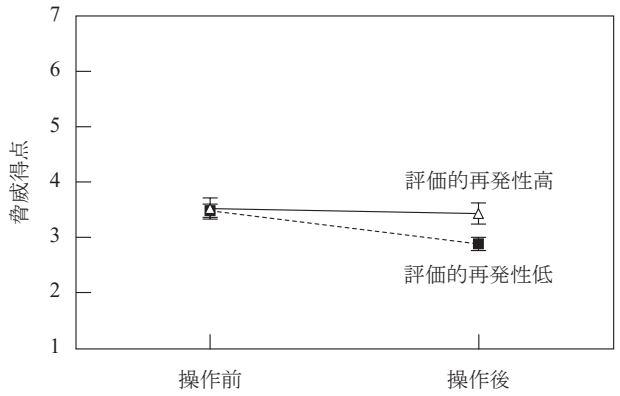

図 5：世界観脅威得点における評価的再発可能性とシナリオ操作の交互作用

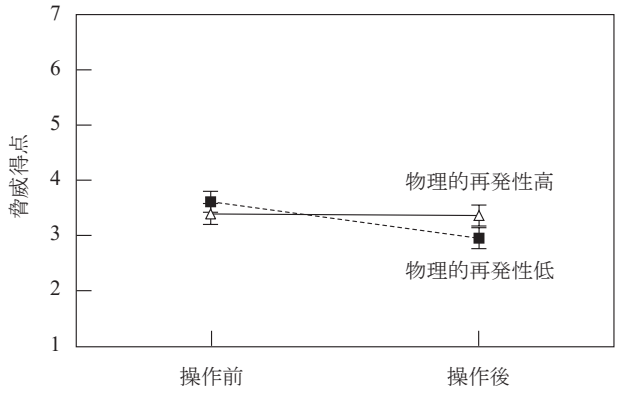

図 6：世界観脅威得点における物理的再発可能性とシナリオ操作の交互作用

4. 考察

本研究では、ゆるしにおけるネガティブな反応の緩和は、ゆるしの情動的側面である怒りだけでなく、認知的側面としての脅威の知覚においても生じることを検討した。具体的には、加害者への評価による再発可能性と物理的な環境による再発可能性をシナリオによって操作し、これらが怒りと脅威の緩和というゆるしを促すことについて検討した。

4.1 再発可能性がゆるしの情動的側面にもたらす影響

ゆるしの情動的側面として注目されてきた怒りについて、評価的、物理的再発可能性の高低にかかわらずシナリオ操作後に怒りは緩和されていたが、いずれの再発可能性も、それが高い条件における参加者は、それが低い条件の参加者よりもシナリオ操作後に強い怒りを感じていた。つまり、加害行為が常態化しやすいという加害者に対する評価や、加害者と物理的に接触する機会は、ゆるしの情動的側面である怒りの緩和を妨げるといえる。

再発可能性の低さがゆるしの情動的側面である怒りを緩和させる理由として、再発可能性が低いことは、将来的に被害を受けるリスクが少ないことを意味するため、怒りが持続されなかったと考えられる。被害を受けた直後は怒りが喚起されても、再発する可能性が低いのであれば、その被害体験について注意を向けたり、考えたりする必要性は低いため、徐々に緩和されていく。ネガティブな体験に注意を向けたり考えたりすることは反すうとして知られており（Nolen-Hoeksema, 1991）、先行研究は、将来的な被害のリスクがゆるしを妨げ（Burnette et al., 2012; Exline & Baumeister, 2000; Mullet & Girard, 2001）、反すうしやすい人ほどゆるしが生じにくいことを示している（McCullough et al., 2001; McCullough, Bono, & Root, 2007）。加えて、本研究の結果は、こうした再発可能性が加害者への評価や物理的な接触機会であっても同様に生じる可能性を示唆している。

4.2 再発可能性がゆるしの認知的側面にもたらす影響

本研究では、ゆるしの認知的側面として 3 つの脅威を仮定したが、因子分析の結果から、対人脅威と場面脅威は 1 つの因子としてまとまっていたため、これらを被害脅威として捉えた。最終的には被害脅威と世界観脅威の 2 つの脅威について検討した。

被害脅威について、シナリオ操作後は操作前よりも脅威の知覚が弱く、評価的、物理的にかかわらず、シナリオ操作後においてのみ、再発可能性が低い条件における参加者は、それが高い条件の参加者よりも加害者や類似した場面に対する脅威の知覚を弱いと評価していた。それゆえ、再発可能性の低さは、加害者や類似した被害状況に対する脅威の知覚を緩和させることが示された。さらに、本研究の結果は、加害者への評価と物理的な接触機会によるいずれの再発可能性によっても被害脅威の緩和が生じることを示している。怒りの緩和と同様に、再発可能性の低さは将来的な被害のリスクの低さを予期させるため、被害に対する脅威を緩和するといえる。

本研究では、ゆるしにおいて緩和される脅威には、特定の他者や被害に対する被害脅威だけでなく、被害によっ

て自らが所属する集団の秩序や安全性、公平性、一般的な他者に対する信頼といった個人の信念体系である世界観に関する脅威も含まれると考えた。結果は、評価的再発可能性が低い条件においてのみ、それが高い条件よりも世界観脅威の知覚が弱いことを示していた。このことは、評価的再発可能性が世界観脅威を緩和させることを意味する。その理由として、加害者への評価によって被害体験の再発可能性が低下することは、被害の原因をその加害者である特定の他者に帰属することができるため、一時的に脅かされた世界観が修復されたと考えられる。

一方で、物理的再発可能性が世界観にもたらす影響は、物理的再発可能性が高い条件におけるシナリオ操作の前後やシナリオ操作後の物理的再発可能性に関する条件間で有意な差が示されなかった。おそらく、物理的な接触機会による再発可能性の低下は、被害の原因を特定しないまま、ただ同じ加害者による被害のリスクを軽減することを意味し、特定の加害者がいなくなっても、世界観脅威は緩和されにくいと考えられる。

以上のことから、本研究におけるゆるしの認知的側面では、被害脅威と世界観脅威で物理的再発可能性に関して異なる結果が得られた（仮説 2 を一部支持）。怒りは脅威の知覚によって生じることから（Baumeister et al., 1996; Blair, 2012; Novaco, 2011）、本研究の結果は、ゆるしにおいて、将来的なリスクに関わる脅威の知覚が重要な認知的側面であり、脅威の緩和によって怒りも緩和される可能性を示唆している。なお、これまでゆるしの認知的側面について具体的に検証した研究はほとんどなく、ましてや脅威の知覚が緩和されることを示した研究はないことから、本研究の結果はゆるし研究において有意義であると思われる。

4.3 本研究の限界点と今後の課題

本研究では、シナリオによって被害の再発可能性を操作したが、被害の内容は、仕事上のミスに対して上司が人格まで否定するような発言を同僚の前でするという一つの出来事のみであった。人が経験する被害は多種多様であり、たった一つの内容を直ちに一般化することは尚早である。なお、本研究の場合、被害は主に精神的なものであり、物理的な損害は生じていない。今後の課題として、物理的な被害など多様な状況においても検討する必要がある。

本研究で想定する世界観は社会的秩序や公平性など多岐に及ぶが、因子分析の結果、本研究の分析対象は一般的な他者への信頼に関する項目のみであった。今後は、さまざまな世界観に関する脅威を対象とし、ゆるしにおいてそれらが緩和されることを検討する必要がある。

本研究の結果は、将来的な被害のリスクが低いのであれば、その被害体験について注意を向けたり、考えたりする必要性はないため、怒りや脅威が徐々に緩和されていくことを示唆している。しかし、被害が大きかったり、重要な場合は将来的なリスクが低くても注意を向ける必要性が生じる。被害の程度や深刻さはこれまでも検討されてきた要因であり（例えば、Bradfield & Aquino, 1999; Fincham, 2005）、それらが脅威の緩和に及ぼす影響については今後検討する必要があるだろう。

引用文献

阿部晋吾（2008）．公正な世界の信念が今後の被害予測に及ぼす影響．日本心理学会第 72 回大会発表抄録集，192.

Averill, J. R. (1983). Studies on anger and aggression: Implications for theories of emotion. *American Psychologist*, 38 (11), 1145-1180.

Baumeister, R. F., Smart, L., & Boden, J. M. (1996). Relation of threatened egotism to violence and aggression: The dark side of high self-esteem. *Psychological Review*, 103 (1), 5-33.

Blair, R. J. R. (2012). Considering anger from a cognitive neuroscience perspective. *WIREs Cognitive Science*, 3 (1), 65-74.

Boon, S. D. & Sulsky, L. M. (1997). Attributions of blame and forgiveness in romantic relationships: A policy-capturing study. *Journal of Social Behavior & Personality*, 12 (1), 19-44.

Bradfield, M. & Aquino, K. (1999). The effects of blame attributions and offender likableness on forgiveness and revenge in the workplace. *Journal of Management*, 25 (5), 607-631.

Burnette, J. L., McCullough, M. E., Van Tongeren, D. R., & Davis, D. E. (2012). Forgiveness results from integrating information about relationship value and exploitation risk. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 38 (3), 345-356.

Enright, R. D. (2001). *Forgiveness is a choice: A step-by-step process for resolving anger and restoring hope*. American Psychological Association.

Exline, J. J. & Baumeister, R. F. (2000). Expressing forgiveness and repentance: Benefits and barriers. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness: Theory, research, and practice* (pp. 133-155). New York: Guilford Press.

Ferguson, T. J. & Rule, B. G. (1983). An attributional perspective on anger and aggression. In R. G. Geen & E. I. Donnerstein (Eds.), *Aggression: Theoretical and empirical reviews* (Vol. 1, pp. 41-74). New York: Academic Press.

Fincham, F. D. (2005). Transgression severity and forgiveness: Different moderators for objective and subjective severity. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 24 (6), 860-875.

Girard, M. & Mullet, E. (1997). Forgive in adolescents, young, middle-aged, and older adults. *Journal of Adult Development*, 4, 209-220.

石川満佐育・濱口佳和（2007）．中学生・高校生におけるゆるし傾向性と外在化問題・内在化問題との関連の検討．教育心理学研究，55，526-537.

加藤司・谷口弘一（2009）．ゆるし尺度作成の試み．教育心理学研究，57，158-167.

Lancaster, C. L., Cobb, A. R., Lee, H.-J., & Telch, M. J. (2016).

The role of perceived threat in the emergence of PTSD and depression symptoms during warzone deployment. *Psychological Trauma: Theory, Research, Practice, and Policy*, 8 (4), 528-534.

Lerner, M. J. (1980). *The belief in a just world: A fundamental delusion*. New York: Plenum Press.

McCullough, M. E. (2000). Forgiveness as human strength: Theory, measurement, and links to well-being. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 19 (1), 43-55.

McCullough, M. E., Bellah, C. G., Kilpatrick, S. D., & Johnson, J. L. (2001). Vengefulness: Relationships with forgiveness, rumination, well-being, and the Big Five. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 27 (5), 601-610.

McCullough, M. E., Bono, G., & Root, L. M. (2007). Rumination, emotion, and forgiveness: Three longitudinal studies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 92 (3), 490-505.

McCullough, M. E., Pedersen, E. J., Tabak, B. A., & Carter, E. C. (2014). Conciliatory gestures promote forgiveness and reduce anger in humans. *Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*, 111, 11211-11216.

McCullough, M. E. & Witvliet, C. V. O. (2011). The psychology of forgiveness. In S. Lopez & C. Snyder (Ed.), *The Oxford handbook of positive psychology* (2nd ed.). (pp. 446-458). New York: Oxford University Press.

McCullough, M. E., Worthington, E. L., Jr., & Rachal, K. C. (1997). Interpersonal forgiving in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73 (2), 321-336.

Mogg, K. & Bradley, B. P. (2016). Anxiety and attention to threat: Cognitive mechanisms and treatment with attention bias modification. *Behaviour Research and Therapy*, 87, 76-108.

Mullet, É. & Girard, M. (2000). Developmental and cognitive points of view on forgiveness. In M. E. McCullough, K. I. Pargament, & C. E. Thoresen (Eds.), *Forgiveness: Theory, research, and practice* (pp. 111-132). New York: Guilford Press.

Novaco, R. W. (2011). Anger dysregulation: Driver of violent offending. *Journal of Forensic Psychiatry & Psychology*, 22 (5), 650-668.

Novaco, R. W. (2016). Anger. In G. Fink (Ed.), *Stress: Concepts, cognition, emotion, and behavior* (pp. 285-292). Elsevier Academic Press.

沼田真美・小浜駿（2022）．ゆるしにおける傷つきの変容過程に関する検討―出来事の分類，転換点，重要度の観点から―．目白大学心理学研究，18，33-44.

大渕憲一（2015）. 失敗しない謝り方. CCC メディアハウス.

Rapske, D. L., Boon, S. D., Alibhai, A. M., & Kheong, M. J. (2010). Not forgiven, not forgotten: An investigation of unforgiven interpersonal offenses. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 29 (10), 1100-1130.

Thompson, L. Y. & Snyder, C. R. (2003). Measuring forgiveness. In S. J. Lopez & C. R. Snyder (Eds.), *Positive psychological assessment: A handbook of models and measures* (pp. 301-312). Washington DC: American Psychological Association.

Williamson, I. & Gonzales, M. H. (2007). The subjective experience of forgiveness: Positive construals of the forgiveness experience. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 26 (4), 407-446.

Worthington, E. L., Jr. (2003). *Forgiving and reconciling: Bridges to wholeness and hope*. Madison: InterVarsity Press.

Worthington, E. L., Jr., Witvliet, C. V. O., Pietrini, P., & Miller, A. J. (2007). Forgiveness, health, and well-being: A review of evidence for emotional versus decisional forgiveness, dispositional forgiveness and reduced unforgiveness. *Journal of Behavioral Medicine*, 30 (4), 291-302.

受稿日 : 2024 年 5 月 23 日
受理日 : 2024 年 7 月 9 日
発行日 : 2024 年 12 月 25 日

Copyright © 2024 Society for Human Environmental Studies

This article is licensed under a Creative Commons [Attribution-Non-Commercial-NoDerivatives 4.0 International] license.

https://doi.org/10.4189/shes.22.123